

【表紙】

【提出書類】	四半期報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の7第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年11月14日
【四半期会計期間】	第75期第2四半期（自平成30年7月1日至平成30年9月30日）
【会社名】	日本空港ビルデング株式会社
【英訳名】	Japan Airport Terminal Co.,Ltd.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長執行役員兼COO 横田 信秋
【本店の所在の場所】	東京都大田区羽田空港三丁目3番2号 第1旅客ターミナルビル
【電話番号】	03(5757)8020
【事務連絡者氏名】	常務取締役執行役員企画管理本部長 田中 一仁
【最寄りの連絡場所】	東京都大田区羽田空港三丁目3番2号 第1旅客ターミナルビル
【電話番号】	03(5757)8020
【事務連絡者氏名】	常務取締役執行役員企画管理本部長 田中 一仁
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

## 第一部【企業情報】

## 第1【企業の概況】

## 1【主要な経営指標等の推移】

回次	第74期 第2四半期連結 累計期間	第75期 第2四半期連結 累計期間	第74期
会計期間	自平成29年 4月1日 至平成29年 9月30日	自平成30年 4月1日 至平成30年 9月30日	自平成29年 4月1日 至平成30年 3月31日
売上高 (百万円)	108,066	137,423	225,953
経常利益 (百万円)	8,748	11,761	16,696
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益 (百万円)	6,193	28,202	11,776
四半期包括利益又は包括利益 (百万円)	7,079	31,593	13,758
純資産額 (百万円)	131,101	198,103	136,156
総資産額 (百万円)	217,710	473,860	239,389
1株当たり四半期(当期)純利 益金額 (円)	76.25	347.20	144.98
潜在株式調整後1株当たり四半 期(当期)純利益金額 (円)	72.78	331.67	138.37
自己資本比率 (%)	58.98	34.03	55.71
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	11,258	16,671	22,257
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	5,498	18,130	28,474
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	4,492	21,352	9,438
現金及び現金同等物の四半期末 (期末)残高 (百万円)	40,372	98,479	42,329

回次	第74期 第2四半期連結 会計期間	第75期 第2四半期連結 会計期間
会計期間	自平成29年 7月1日 至平成29年 9月30日	自平成30年 7月1日 至平成30年 9月30日
1株当たり四半期純利益金額 (円)	43.75	40.85

(注) 1. 当社は四半期連結財務諸表を作成しておりますので、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載しておりません。

2. 売上高には消費税等は含まれておりません。

3. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第1四半期連結会計期間の期首から適用しており、前第2四半期連結累計期間及び前連結会計年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

## 2【事業の内容】

当第2四半期連結累計期間において、当社グループ（当社及び当社の関係会社）が営む事業の内容について、重要な変更はありません。また下記セグメントに係る主要な関係会社の異動につきましては、次のとおりであります。

### <施設管理運営業>

第1四半期連結会計期間において、東京国際空港ターミナル株式会社の第三者割当増資引受に伴う払込手続きを完了し連結子会社といたしました。

また、当第2四半期連結会計期間において、株式会社羽田未来総合研究所を設立し、連結子会社といたしました。

### <物品販売業>

第1四半期連結会計期間において、東京国際空港ターミナル株式会社の第三者割当増資引受に伴う払込手続きを完了し連結子会社といたしました。

### <飲食業>

第1四半期連結会計期間において、東京国際空港ターミナル株式会社の第三者割当増資引受に伴う払込手続きを完了し連結子会社といたしました。

これにより、当社グループの構成は、当社（日本空港ビルデング株式会社）及び子会社21社、関連会社10社となりました。

## 第2【事業の状況】

### 1【事業等のリスク】

当第2四半期連結累計期間において、新たな事業等のリスクの発生、または、前事業年度の有価証券報告書に記載した事業等のリスクについての重要な変更はありません。

### 2【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、当四半期連結会計期間の末日現在において当社グループ（当社及び連結子会社）が判断したものであります。

#### (1)財政状態及び経営成績の状況

当第2四半期連結累計期間におけるわが国経済は、緩やかに回復しております。先行きにつきましては、雇用・所得環境の改善が続く中で、各種政策の効果もあって、緩やかな回復が続くことが期待されますが、通商問題の動向が世界経済に与える影響や海外経済の不確実性、金融資本市場の変動の影響に加え、相次いでいる自然災害の経済に与える影響に十分留意する必要がある状況となっております。

当社の事業環境としましては、政府が2020年の訪日外国人旅客数を4,000万人とする目標の中、航空路線の新規就航や増便などによる航空座席供給量の増加に加え、継続的に展開されている訪日旅行プロモーションの効果もあり、訪日外国人旅客数は2018年累計（1月～9月）で2,346万人となり、前年を上回りました。一方で、大阪府北部の地震や相次ぐ台風の上陸、北海道胆振東部地震などの自然災害の影響により9月の訪日外国人旅客数が前年比で減少に転ずるなど、訪日需要への影響が懸念されております。

その中で、当第2四半期連結累計期間の航空旅客数につきましては、自然災害の影響により、本年7月以降に航空旅客数の増加の伸びが鈍化する傾向が見受けられましたが、各航空会社による羽田空港国際線深夜時間帯での増便や、需要に応じた各種割引運賃設定の効果で、羽田空港国内線、国際線ともに前年を上回りました。また、成田空港の国際線においても、堅調な航空需要に支えられたことに加え、関西空港が被災した影響により臨時便が運航されたこともあり、前年を上回っております。

このような状況のもと、当社グループは、すべてのステークホルダーに最高に満足していただける空港を目指す長期的な経営ビジョン「To Be a World Best Airport」の実現に向けて、2020年度を視野に入れた5年間の成長戦略として中期経営計画を策定し、本年4月の東京国際空港ターミナル株式会社（以下、「T I A T」という。）の第三者割当増資の引き受けに伴う連結子会社化と、2020年以降の羽田空港の国際線需要のさらなる高まりに対する空港機能強化に、当社の成長戦略を重ね合わせて、中期経営計画の見直しを行いました。そして、今期の経営上の主な課題として、T I A Tの連結子会社化による効果、目的の具現化と影響の適正化、環境変化への対応、空港型市中免税店のさらなる業績改善を掲げて、「戦略の3本柱」である「羽田空港の“あるべき姿”の追求」、「強みを活かした事業領域の拡大・収益多元化」、「収益基盤再構築・競争優位の確立」に基づいて、さまざまな施策に取り組んでおります。

「羽田空港の“あるべき姿”の追求」におきましては、羽田空港の国際線再拡張に向けた旅客ターミナル整備を進めており、その一環として本年5月に国内線旅客用の第2旅客ターミナル北側ボーディングステーションを供用開始しました。また本年12月には、第2旅客ターミナル北側サテライトを供用開始する予定であります。それ以外の拡張部分についても2020年3月の供用開始に向けて、計画通り工事を進めております。その他に、本年10月より第1旅客ターミナルで旅客利便および館内環境の向上を目的にリニューアル工事に着手しました。また、これらに加えて今後の事業環境が大きく変革している中で、羽田空港の立地という資源を最大限活用し、当社の事業をより安定的に成長へと結びつけるために、これまで培った経験とノウハウをより広範囲に活用するとともに、外部の知見を生かしてさらなる事業領域を拡大することを目的に、本年7月2日に「株式会社羽田未来総合研究所」を設立しました。今後の事業展開としては、アートや文化などをオリンピック後の日本経済を支えていくジャンルとして位置づけ、羽田空港というロケーションの優位性を活かし、全国の自治体等と羽田空港とを繋ぎ、地域再生や地域創生を展開する一方、優れた日本製品やアート、日本文化を海外へ発信するなど、新たな価値を創造してまいります。また、時代の求める人材教育やシンクタンクとしての機能を十分に発揮しつつ、新たなライフスタイルの提案など、日本の未来予想図を具体的に提案してまいります。

「強みを活かした事業領域の拡大・収益多元化」では、本年4月に羽田空港国際線の到着エリア内に到着時免税店を出店し、新たな購買需要を取り込んで好調に推移しております。また、空港型市中免税店「Japan Duty Free GINZA」では、消費税免税販売場の拡大や主要顧客である中国人に人気の高い新規ブランドの展開を始めるなど売上増進策に取り組み、業績は計画を上回るペースで推移しております。

さらに「収益基盤再構築・競争優位の確立」では、本年4月と6月に中部空港で出店した「Air BIC CAMERA」において、訪日外国人旅客を主要ターゲットとした商品戦略により好調に推移しております。空港外においても東京お台場のアクアシティお台場店に続いて、11月2日にダイバーシティ東京プラザ店も出店しており、訪日外国人による国内消費の機会を捉えて収益の確保に努めております。また、ビジネスパーソンをターゲットとしたビジネスモールプロジェクト「THE HANEDA HOUSE」も、本年12月のグランドオープンを目指して準備を進めております。

その他の取り組みとして、財務安定性及び資本効率の向上を両立する戦略的な手法であるハイブリッドローン（劣後特約付ローン）による資金調達 300億円を8月31日に実行しております。格付機関より一定の資本性が認められることから、株式の希薄化なしに実質的な財務体質の強化を図っております。

なお、本年9月に羽田空港旅客ターミナルは英国SKYTRAX社が実施する“Global Airport Rating”において、5年連続で世界最高水準である「5スターエアポート」を獲得しました。当社ではこれからも、首都圏の空の玄関口として、すべての空港スタッフが常に高い意識を持ち、お客さま目線に立った施設とサービスの提供を心がけるとともに、羽田空港の“あるべき姿”を追求し、世界中のお客さまから信頼され続ける空港を目指してまいります。

以上の結果、当第2四半期連結累計期間の財政状態及び経営成績につきましては、次のとおりとなりました。

#### 財政状態

##### （資産）

当第2四半期連結会計期間末における流動資産は 1,329億4千3百万円となり、前連結会計年度末に比べ609億5千8百万円増加いたしました。これは、主に売掛金が24億9百万円減少したものの、現金及び預金が561億6千3百万円、流動資産その他が41億1千万円、それぞれ増加したこと等によるものであります。固定資産は 3,409億1千6百万円となり、前連結会計年度末に比べ1,735億1千2百万円増加いたしました。これは主に、建物および構築物が1,140億5千1百万円増加したこと等によるものであります。

この結果、総資産は 4,738億6千万円となり、前連結会計年度末に比べ2,344億7千万円増加いたしました。

##### （負債）

当第2四半期連結会計期間末における流動負債は 457億8千8百万円となり、前連結会計年度末に比べ81億3百万円増加いたしました。これは、主に短期借入金が55億9千2百万円増加したこと等によるものであります。固定負債は 2,299億6千7百万円となり、前連結会計年度末に比べ1,644億2千万円増加いたしました。これは主に長期借入金が1,328億1千2百万円増加したこと等によるものであります。

この結果、負債合計は 2,757億5千6百万円となり、前連結会計年度末に比べ1,725億2千3百万円増加いたしました。

(純資産)

当第2四半期連結会計期間末における純資産合計は1,981億3百万円となり、前連結会計年度末に比べ619億4千7百万円増加いたしました。これは主に、利益剰余金が262億5千2百万円増加したこと等によるものであります。

この結果、自己資本比率は34.0%(前連結会計年度末は55.7%)となりました。

経営成績

当第2四半期連結累計期間の業績につきましては、T I A Tの連結子会社化による収益構造の変化や特別損益の発生もあり、営業収益は1,374億2千3百万円(前年同期比27.2%増)、営業利益は129億6千1百万円(前年同期比92.1%増)、経常利益は117億6千1百万円(前年同期比34.4%増)、親会社株主に帰属する四半期純利益は282億2百万円(前年同期比355.3%増)となりました。

セグメント別の業績は次のとおりであります。なお、営業利益はセグメント利益に該当します。

(施設管理運営業)

T I A Tの連結子会社化に伴い、羽田空港国際線旅客ターミナルにおける家賃収入、国際線旅客取扱施設利用料収入、駐車場収入、広告・ラウンジ収入等が追加される一方で、これまでの国際線業務受託料収入は相殺されております。

連結子会社化以外の影響では、家賃収入につきましては、国内線旅客ターミナルでの航空会社事務室の貸室増等により、前年同期を上回りました。

施設利用料収入につきましては、自然災害などの影響による国内線の欠航もありましたが、堅調なビジネス需要や訪日旅客の国内移動需要などによる国内線航空旅客数の増加により、国内線旅客取扱施設利用料収入が増加して、前年同期を上回りました。

その他の収入につきましては、国内線でのラウンジ収入の増加等により、前年同期を上回りました。

この結果、施設管理運営業の営業収益は433億4千3百万円(前年同期比48.0%増)、営業利益は84億4千6百万円(前年同期比123.0%増)となりました。

(物品販売業)

T I A Tの連結子会社化に伴い、羽田空港国際線旅客ターミナルにおける免税売店売上が追加される一方で、これまでの卸売上が相殺されております。

連結子会社化以外の影響では、国内線売店売上ににつきましては、国内線航空旅客数の増加及び購買単価を引き上げる施策を実施した結果、前年同期を上回りました。

国際線売店売上ににつきましては、羽田空港国際線航空旅客数の増加、到着時免税店の開業、中部空港での新規店舗を開業したことに加え、空港免税店で顧客の嗜好に合わせた商品構成や店舗オペレーションの効率化などにより、購買客数、購買単価ともに増加傾向が続いていること、さらに空港型市中免税店での営業施策の効果により前年同期を上回りました。なお、関西空港の一時閉鎖による影響で、関西空港の直営店舗の営業休止による減収がありましたが、羽田空港、成田空港、中部空港での商品売上が増加して、9月単月としても商品売上は前年を上回っております。

その他の売上ににつきましては、地方空港への卸売上が好調に推移しており、前年同期を上回りました。

この結果、物品販売業の営業収益は870億3千4百万円(前年同期比23.8%増)、営業利益は81億2百万円(前年同期比55.4%増)となりました。

(飲食業)

T I A Tの連結子会社化に伴い、羽田空港国際線旅客ターミナルにおける飲食店舗売上が追加される一方で、これまでの国際線業務受託料収入が相殺されております。

連結子会社化以外の影響では、飲食店舗売上ににつきましては、国内線旅客ターミナルで飲食店舗のリニューアルや国際化工事の進展に伴う一部飲食店舗の閉鎖等により前年同期を下回りました。

機内食売上ににつきましては、顧客である外国航空会社の前期からの増便や新規取引開始等により、前年同期を上回りました。

この結果、飲食業の営業収益は 115億2千3百万円（前年同期比 3.2%増）、営業利益は 4億9千2百万円（前年同期比 11.5%増）となりました。

## （2）キャッシュ・フローの状況

当第2四半期連結累計期間末における現金及び現金同等物（以下「資金」といいます。）は、前連結会計年度末に比べ 561億4千9百万円増加し、984億7千9百万円となりました。

当第2四半期連結累計期間における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

### （営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果得られた資金は、前第2四半期連結累計期間に比べ 54億1千3百万円増加（前年同期比 48.1%増）し、166億7千1百万円となりました。

これは主に、税金等調整前四半期純利益が増加したこと等によるものであります。

### （投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果得られた資金は、前第2四半期連結累計期間に比べ 236億2千9百万円増加（前第2四半期連結累計期間は 54億9千8百万円の支出）し、181億3千万円となりました。

これは主に、連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による収入等によるものであります。

### （財務活動によるキャッシュ・フロー）

財務活動の結果得られた資金は、前第2四半期連結累計期間に比べ 258億4千5百万円増加（前第2四半期連結累計期間は 44億9千2百万円の支出）し、213億5千2百万円となりました。

これは主に、長期借入れによる収入等によるものであります。

## （3）事業上及び財務上の対処すべき課題

当第2四半期連結累計期間において、当社グループが対処すべき課題について重要な変更はありません。

当社グループは、全てのステークホルダーに満足していただける空港を目指すとともに、事業及び収益機会を創造し、持続的成長を果たすべく、長期ビジョンとして「To Be a World Best Airport」を掲げました。その長期ビジョンに基づき、中期経営計画（2016年度から2020年度）を策定し、羽田空港の“あるべき姿”の追求、強みを活かした事業領域の拡大・収益多元化、収益基盤再構築・競争優位の確立を戦略の3本柱とし、その実践基盤として組織・ガバナンスの再編・強化に取り組んでおります。

現在、国土交通省では「2018年度（平成30年度）航空局関係予算の決定概要」に基づき、2020年東京オリンピック・パラリンピックとその先を見据えた首都圏空港の機能強化や、テロ対策の強化や安全な運航の確保など万全なセキュリティ・セイフティに向けた取組みが進められております。

当社におきましても、その確実な対応が求められている中で、羽田空港国内線、国際線旅客ターミナルの拡張整備を推進するほか、経営方針である旅客ターミナルにおける絶対安全の確立のもと、ハード面とソフト面におきましてさまざまな安全対策を行っております。また、バリアフリーへの対策や内際旅客ターミナルの一体運用に伴う案内方法への対応など、今後も空港利用者のあらゆるニーズをとらえて利便性、快適性、機能性の向上に努めてまいります。さらに、国管理空港などで民間による航空系事業と非航空系事業の経営を一体化した運営形態への取り組みが進められており、当社もこの動向について幅広く注視し、情報を収集しております。

このように当社を取り巻く事業環境が大きく変革している中で、当社グループは「株式会社羽田未来総合研究所」の事業展開等により羽田空港の立地という資源を最大限活用し、地域再生、地域創生を展開する一方、優れた日本製品やアート、日本文化を海外へ発信するなど、新規事業の創造に繋げて、当社の事業をより安定的に成長へと結びつけてまいります。また、旅客ターミナルでのさらなる顧客満足度の向上を目指し、SKYTRAX社の空港評価の連続受賞を含めた羽田空港の包括的なブランディングに努めてまいります。

その他の課題としては、営業面において市中免税店事業のさらなる改善に取り組んでまいりましたが、さまざまな営業施策や広告宣伝の効果で好調に推移しております。一方で、訪日外国人の「モノ消費」から「コト消費」への転換など消費動向の変化に加え、越境ECビジネスの拡大や決済方法の多様化など物品販売を取り巻く環境が大きく変動しております。特に当社免税店で大きな購買シェアを占める中国人旅客の旅行消費額における買物代において、現時点では商品売上の増加傾向が続いているものの、訪日外国人消費動向調査による全国的な中国人旅客の旅行消費額における買物代は、今年度に入り減少傾向が表れております。それに加えて、日本各地で発

生じた自然災害の影響による訪日需要の下振れリスクがあることから、免税事業全般を中心に、今後の事業環境の変化に迅速かつ柔軟に対応して一層強化してまいります。

このように事業環境に応じた当社の課題を的確に捉えつつ、新たな価値を創造する環境の整備や株主・投資家に対する対話機会の拡大と各施策の確実性を高めるために組織・ガバナンスの再編・強化を図りながら、中期経営計画を推進してまいります。また、働き方関連法案が可決され、改正法施行に向けた動きが活発化する中で、従業員のワークライフバランスの適正化と仕事の効率化を目指し対応してまいります。

今後も当社は、空港法に基づく羽田空港における国内線旅客ターミナルを建設・管理運営する空港機能施設事業者としての責務を果たすべく、国際線旅客ターミナルを建設・管理運営する連結子会社であるT I A Tと連携して、日本経済や航空業界の動向等を見極め、公共性と企業性の調和という基本理念と中期経営計画に基づき、グループ丸となって旅客ターミナルの利便性、快適性及び機能性の向上を目指し、顧客第一主義と絶対安全の確立に努め、絶え間ない羽田空港の価値創造と航空輸送の発展に貢献することにより、企業価値の向上を図ってまいります。



(4) 主要な設備

当第2四半期連結累計期間において、東京国際空港ターミナル株式会社を連結子会社化したことにより、同子会社が所有する設備を当社の国内子会社の主要な設備の範囲に含めております。

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額						従業員数 (人)
				建物及び 構築物 (百万円)	機械装置 及び運搬 具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	リース資産 (百万円)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
東京国際空港 ターミナル(株)	羽田空港 (東京都大田区)	施設管理 運営業	国際線旅客 ターミナル ビル	101,864	5,560	- (-)	-	50,857	158,282	26
"	"	"	国際線駐車 場	11,318	-	- (-)	-	31	11,349	-
"	"	物品販売 業	店舗施設	2,100	-	- (-)	-	773	2,873	16
"	"	飲食業	"	593	-	- (-)	-	32	625	-

(注) 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

(5) 重要な設備の新設等

当第2四半期連結累計期間において、東京国際空港ターミナル株式会社を連結子会社化したことにより、著しい変更があったものは、次のとおりであります。

会社名	所在地	セグメント の名称	設備の内容	投資予定金額		資金調達方 法	着手及び完了予定年月		完成後の能 力
				総額 (百万円)	既支払額 (百万円)		着手	完了	
東京国際空港 ターミナル(株)	東京都 大田区	施設管理運 営業	国際線旅客 ターミナルビ ル等 (増築工事)	50,000	7,809	自己資金及 び借入金	平成29年 11月	平成32年 3月	1

1 国際線旅客ターミナルビル増改築等

(注) 上記金額には、消費税等は含まれておりません。

### 3【経営上の重要な契約等】

当第2四半期連結会計期間において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等はありません。

### 第3【提出会社の状況】

#### 1【株式等の状況】

##### (1)【株式の総数等】

###### 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	288,000,000
計	288,000,000

###### 【発行済株式】

種類	第2四半期会計期間末現在発行数(株) (平成30年9月30日)	提出日現在発行数(株) (平成30年11月14日)	上場金融商品取引所名又は登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	84,476,500	84,476,500	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数 100株
計	84,476,500	84,476,500	-	-

##### (2)【新株予約権等の状況】

###### 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

###### 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

##### (3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

##### (4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数増減数 (千株)	発行済株式総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金増減額 (百万円)	資本準備金残高 (百万円)
平成30年7月1日～ 平成30年9月30日	-	84,476	-	17,489	-	21,309

## (5) 【大株主の状況】

平成30年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
日本航空株式会社	東京都品川区東品川2-4-11	4,398	5.41
ANAホールディングス株式会社	東京都港区東新橋1-5-2	4,398	5.41
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社 (三井住友信託銀行再信託分・京浜急行電鉄株式会社退職給付信託口)	東京都中央区晴海1-8-11	3,484	4.28
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内2-7-1	3,408	4.19
株式会社みずほ銀行	東京都千代田区大手町1-5-5	3,300	4.06
三菱地所株式会社	東京都千代田区大手町1-1-1	3,111	3.83
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2-11-3	2,838	3.49
大成建設株式会社	東京都新宿区西新宿1-25-1	2,831	3.48
みずほ信託銀行 退職給付信託 日本通運口株式会社日本政策投資銀行	東京都中央区晴海1-8-12 晴海アイランド トリトンスクエア オフィスタワーZ棟	2,337	2.87
	東京都千代田区大手町1-9-6	1,829	2.25
計	-	31,935	39.31

当社は、自己株式3,247,883株を所有しておりますが、上記大株主の状況には含めておりません。

## ( 6 ) 【議決権の状況】

## 【発行済株式】

平成30年9月30日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 3,247,800	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 81,205,500	812,055	-
単元未満株式	普通株式 23,200	-	-
発行済株式総数	84,476,500	-	-
総株主の議決権	-	812,055	-

## 【自己株式等】

平成30年9月30日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
日本空港ビルデング株式会社	東京都大田区羽田空港3-3-2 第1旅客ターミナルビル	3,247,800	-	3,247,800	3.84
計	-	3,247,800	-	3,247,800	3.84

## 2 【役員の状況】

該当事項はありません。

## 第4【経理の状況】

### 1．四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（平成19年内閣府令第64号）に基づいて作成しております。

### 2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第2四半期連結会計期間（平成30年7月1日から平成30年9月30日まで）及び第2四半期連結累計期間（平成30年4月1日から平成30年9月30日まで）に係る四半期連結財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人による四半期レビューを受けております。なお、EY新日本有限責任監査法人は平成30年7月1日をもって新日本有限責任監査法人から名称変更しております。

## 1【四半期連結財務諸表】

## (1)【四半期連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成30年9月30日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	42,487	98,650
売掛金	19,566	17,157
商品及び製品	6,512	9,615
原材料及び貯蔵品	161	146
その他	3,294	7,405
貸倒引当金	37	30
流動資産合計	71,985	132,943
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	281,100	444,471
減価償却累計額及び減損損失累計額	204,919	254,239
建物及び構築物(純額)	76,180	190,231
機械装置及び運搬具	11,827	21,922
減価償却累計額及び減損損失累計額	8,821	12,636
機械装置及び運搬具(純額)	3,005	9,286
土地	11,371	11,371
リース資産	1,159	1,193
減価償却累計額及び減損損失累計額	537	618
リース資産(純額)	621	575
建設仮勘定	21,496	51,346
その他	32,101	55,114
減価償却累計額及び減損損失累計額	26,789	45,164
その他(純額)	5,311	9,950
有形固定資産合計	117,987	272,761
無形固定資産	1,889	40,728
投資その他の資産		
投資有価証券	31,953	17,267
長期貸付金	6,665	2
繰延税金資産	5,789	5,856
退職給付に係る資産	298	545
その他	2,820	3,753
投資その他の資産合計	47,527	27,426
固定資産合計	167,404	340,916
資産合計	239,389	473,860

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当第2四半期連結会計期間 (平成30年9月30日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	9,707	9,179
短期借入金	7,790	13,382
未払法人税等	3,202	4,669
賞与引当金	1,673	1,729
役員賞与引当金	250	118
その他	15,061	16,710
流動負債合計	37,685	45,788
固定負債		
社債	-	11,195
新株予約権付社債	30,070	30,058
長期借入金	28,210	161,022
リース債務	504	452
役員退職慰労引当金	-	49
退職給付に係る負債	3,304	3,301
資産除去債務	471	475
その他	2,986	23,411
固定負債合計	65,547	229,967
負債合計	103,233	275,756
<b>純資産の部</b>		
株主資本		
資本金	17,489	17,489
資本剰余金	21,337	21,337
利益剰余金	92,826	119,078
自己株式	3,245	3,246
株主資本合計	128,408	154,659
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	6,276	6,304
繰延ヘッジ損益	1,259	288
為替換算調整勘定	54	52
退職給付に係る調整累計額	116	30
その他の包括利益累計額合計	4,954	6,616
非支配株主持分	2,793	36,827
純資産合計	136,156	198,103
負債純資産合計	239,389	473,860



## (2) 【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

## 【四半期連結損益計算書】

## 【第2四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自平成29年4月1日 至平成29年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成30年4月1日 至平成30年9月30日)
営業収益		
家賃収入	6,639	8,693
施設利用料収入	9,448	21,663
その他の収入	13,773	10,442
商品売上高	69,587	86,422
飲食売上高	8,617	10,201
営業収益合計	108,066	137,423
売上原価		
商品売上原価	52,573	61,112
飲食売上原価	5,473	5,616
売上原価合計	58,047	66,729
営業総利益	50,019	70,694
販売費及び一般管理費		
従業員給料	4,571	5,202
賞与引当金繰入額	1,462	1,627
役員賞与引当金繰入額	114	118
退職給付費用	493	481
賃借料	6,105	8,530
業務委託費	12,621	14,701
減価償却費	5,233	11,998
その他の経費	12,668	15,071
販売費及び一般管理費合計	43,270	57,732
営業利益	6,748	12,961
営業外収益		
受取利息	313	13
受取配当金	227	226
持分法による投資利益	1,371	169
雑収入	300	539
営業外収益合計	2,212	948
営業外費用		
支払利息	159	1,517
固定資産除却損	33	24
支払手数料	0	533
雑支出	19	72
営業外費用合計	212	2,148
経常利益	8,748	11,761
特別利益		
固定資産売却益	1	-
資産負債相殺益	-	5,626
負ののれん発生益	-	20,126
その他	-	207
特別利益合計	1	25,960
特別損失		
固定資産除却損	4	9
その他の投資評価損	8	-
段階取得に係る差損	-	2,725
その他	-	63
特別損失合計	12	2,798
税金等調整前四半期純利益	8,736	34,923
法人税等	2,454	5,279
四半期純利益	6,281	29,644
非支配株主に帰属する四半期純利益	87	1,442
親会社株主に帰属する四半期純利益	6,193	28,202

## 【四半期連結包括利益計算書】

## 【第2四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自平成29年4月1日 至平成29年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成30年4月1日 至平成30年9月30日)
四半期純利益	6,281	29,644
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	461	25
繰延ヘッジ損益	-	566
為替換算調整勘定	0	1
退職給付に係る調整額	123	92
持分法適用会社に対する持分相当額	211	1,265
その他の包括利益合計	797	1,948
四半期包括利益	7,079	31,593
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	6,970	29,864
非支配株主に係る四半期包括利益	108	1,729

## (3)【四半期連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自平成29年4月1日 至平成29年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成30年4月1日 至平成30年9月30日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前四半期純利益	8,736	34,923
減価償却費	5,286	12,047
負ののれん発生益	-	20,126
資産負債相殺益	-	5,626
段階取得に係る差損益(は益)	-	2,725
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	6	55
退職給付に係る資産の増減額(は増加)	66	171
賞与引当金の増減額(は減少)	67	55
役員賞与引当金の増減額(は減少)	113	132
受取利息及び受取配当金	541	239
支払利息	159	1,517
持分法による投資損益(は益)	1,371	169
有形固定資産除却損	37	34
国庫補助金	-	207
売上債権の増減額(は増加)	609	299
たな卸資産の増減額(は増加)	1,500	262
その他の流動資産の増減額(は増加)	1,955	2,591
仕入債務の増減額(は減少)	457	527
その他の流動負債の増減額(は減少)	1,424	924
その他の固定負債の増減額(は減少)	15	45
その他	7	212
小計	12,214	22,887
利息及び配当金の受取額	549	245
利息の支払額	143	1,683
法人税等の支払額又は還付額(は支払)	1,361	4,777
営業活動によるキャッシュ・フロー	11,258	16,671
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
定期預金の預入による支出	11	13
投資有価証券の取得による支出	14	185
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による収入	-	46,211
有形固定資産の取得による支出	5,087	27,670
無形固定資産の取得による支出	274	302
長期前払費用の取得による支出	182	2
国庫補助金による収入	-	207
その他の支出	110	139
その他の収入	181	25
投資活動によるキャッシュ・フロー	5,498	18,130
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
短期借入金の純増減額(は減少)	200	100
長期借入れによる収入	-	30,000
長期借入金の返済による支出	3,120	6,677
リース債務の返済による支出	157	86
親会社による配当金の支払額	1,380	1,949
非支配株主への配当金の支払額	34	33
その他	0	0
財務活動によるキャッシュ・フロー	4,492	21,352
現金及び現金同等物に係る換算差額	2	5
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	1,263	56,149
現金及び現金同等物の期首残高	39,108	42,329
現金及び現金同等物の四半期末残高	40,372	98,479

【注記事項】

(連結の範囲又は持分法適用の範囲の変更)

第1四半期連結会計期間において、持分法適用関連会社であった東京国際空港ターミナル株式会社の第三者割当増資引受に伴う払込手続きを完了し連結子会社化したため、連結の範囲に含めております。

また、当第2四半期連結会計期間より、株式会社羽田未来総合研究所を新たに設立したため、連結の範囲に含めております。

(四半期連結財務諸表の作成にあたり適用した特有の会計処理)

(税金費用の計算)

税金費用については、当第2四半期連結会計期間を含む連結会計年度の税引前当期純利益に対する税効果会計適用後の実効税率を合理的に見積り、税引前四半期純利益に当該見積実効税率を乗じて計算しております。

(追加情報)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」等の適用)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第1四半期連結会計期間の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示しております。

(四半期連結貸借対照表関係)

保証債務

次の関係会社について、金融機関からの借入に対し債務保証を行っております。

前連結会計年度 (平成30年3月31日)		当第2四半期連結会計期間 (平成30年9月30日)	
日本エアポートデリカ株式会社 (借入債務)	225百万円	日本エアポートデリカ株式会社 (借入債務)	225百万円

(四半期連結損益計算書関係)

資産負債相殺益

資産負債相殺益は、平成30年4月27日に東京国際空港ターミナル株式会社(以下、「T I A T」という。)の第三者割当増資引受に伴う払込手続きを完了し連結子会社とした手続きにおいて、T I A Tの社債及び長期借入金を時価評価し、当社の投資有価証券と長期貸付金とを相殺消去した際に発生した特別利益であります。

## (四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の四半期末残高と四半期連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前第2四半期連結累計期間 (自平成29年4月1日 至平成29年9月30日)	当第2四半期連結累計期間 (自平成30年4月1日 至平成30年9月30日)
現金及び預金勘定	38,516百万円	98,650百万円
有価証券勘定	2,000	-
預入期間が3ヵ月を超える定期預金	143	171
現金及び現金同等物	40,372	98,479

## (株主資本等関係)

前第2四半期連結累計期間(自平成29年4月1日至平成29年9月30日)

## 1. 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配 当額(円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成29年6月29日 定時株主総会	普通株式	1,380	17.0	平成29年3月31日	平成29年6月30日	利益剰余金

2. 基準日が当第2四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第2四半期連結会計期間  
未後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配 当額(円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成29年11月8日 取締役会	普通株式	1,624	20.0	平成29年9月30日	平成29年12月5日	利益剰余金

当第2四半期連結累計期間(自平成30年4月1日至平成30年9月30日)

## 1. 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配 当額(円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成30年6月27日 定時株主総会	普通株式	1,949	24.0	平成30年3月31日	平成30年6月28日	利益剰余金

2. 基準日が当第2四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第2四半期連結会計期間  
未後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配 当額(円)	基準日	効力発生日	配当の原資
平成30年11月7日 取締役会	普通株式	1,868	23.0	平成30年9月30日	平成30年12月4日	利益剰余金

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前第2四半期連結累計期間(自平成29年4月1日 至平成29年9月30日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント				調整額 (注1)	四半期連結 損益計算書 計上額 (注2)
	施設管理 運営業	物品販売業	飲食業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	28,305	69,895	9,866	108,066	-	108,066
セグメント間の内部 売上高又は振替高	989	415	1,303	2,708	(2,708)	-
計	29,294	70,310	11,169	110,775	(2,708)	108,066
セグメント利益	3,787	5,215	441	9,444	(2,695)	6,748

(注) 1. セグメント利益の調整額には、各報告セグメントに配分していない親会社本社の総務部門等管理部門に係る費用2,699百万円が含まれております。

2. セグメント利益は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報  
該当事項はありません。

当第2四半期連結累計期間(自平成30年4月1日 至平成30年9月30日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント				調整額 (注1)	四半期連結 損益計算書 計上額 (注2)
	施設管理 運営業	物品販売業	飲食業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	40,661	86,560	10,201	137,423	-	137,423
セグメント間の内部 売上高又は振替高	2,682	473	1,322	4,478	(4,478)	-
計	43,343	87,034	11,523	141,902	(4,478)	137,423
セグメント利益	8,446	8,102	492	17,042	(4,080)	12,961

(注) 1. セグメント利益の調整額には、各報告セグメントに配分していない親会社本社及び一部子会社の総務部門等管理部門に係る費用4,089百万円が含まれております。

2. セグメント利益は、四半期連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

3. 第1四半期連結会計期間において、東京国際空港ターミナル株式会社の株式を取得し、新たに連結の範囲に含めております。

これにより、前連結会計年度の末日に比べ、当第2四半期累計期間の報告セグメントの資産の金額は、「施設管理運営業」において175,926百万円、「物品販売業」において6,547百万円、「飲食業」において628百万円増加しております。

2. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報  
該当事項はありません。

(金融商品関係)

企業集団の事業の運営において重要なものであり、前連結会計年度の末日に比して著しい変動が認められるものは、次のとおりであります。

前連結会計年度(平成30年3月31日)

科目	連結貸借対照表計上額 (百万円)(*)	時価 (百万円)(*)	差額 (百万円)
(1) 社債	-	-	-
(2) 長期借入金	(33,800)	(34,398)	598

当第2四半期連結会計期間(平成30年9月30日)

科目	四半期連結貸借対照表計上額 (百万円)(*)	時価 (百万円)(*)	差額 (百万円)
(1) 社債	(11,195)	(11,034)	161
(2) 長期借入金	(172,105)	(172,305)	199

(\*) 負債に計上されているものについては、( )で示しております。

(注) 金融商品の時価の算定方法

(1) 社債

元利金の合計額を新規発行を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。

(2) 長期借入金

1年以内返済長期借入金及び長期借入金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映し、また、当社の信用状態は実行後大きく異なっていないことから、時価は帳簿価額と近似していると考えられるため、当該帳簿価額によっております。固定金利によるものは、一定の期間ごとに区分した当該長期借入金の元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。

なお、前連結会計年度末における1年以内返済長期借入金の連結貸借対照表計上額は、5,590百万円、当第2四半期連結会計期間末における1年以内返済長期借入金の四半期連結貸借対照表計上額は、11,082百万円であります。

( 1 株当たり情報 )

1 株当たり四半期純利益金額及び算定上の基礎、潜在株式調整後 1 株当たり四半期純利益金額及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前第 2 四半期連結累計期間 ( 自 平成29年 4 月 1 日 至 平成29年 9 月30日 )	当第 2 四半期連結累計期間 ( 自 平成30年 4 月 1 日 至 平成30年 9 月30日 )
( 1 ) 1 株当たり四半期純利益金額	76円25銭	347円20銭
( 算定上の基礎 )		
親会社株主に帰属する四半期純利益金額 ( 百万円 )	6,193	28,202
普通株主に帰属しない金額 ( 百万円 )	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する四半期純利益金額 ( 百万円 )	6,193	28,202
普通株式の期中平均株式数 ( 千株 )	81,228	81,228
( 2 ) 潜在株式調整後 1 株当たり四半期純利益金額	72円78銭	331円67銭
( 算定上の基礎 )		
親会社株主に帰属する四半期利益調整額 ( 百万円 )	8	8
( うち受取利息 ( 税額相当額控除後 ) ( 百万円 ) )	( 8 )	( 8 )
普通株式増加数 ( 千株 )	3,751	3,776
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後 1 株当たり四半期純利益金額の算定に含めなかった潜在株式で、前連結会計年度末から重要な変動があったものの概要	-	-

( 重要な後発事象 )

該当事項はありません。

2 【その他】

平成30年11月 7 日開催の取締役会において、当期中間配当に関し、次のとおり決議いたしました。

配当金の総額 1,868百万円

1 株当たりの金額 23円00銭

支払請求の効力発生日及び支払開始日 平成30年12月 4 日

( 注 ) 平成30年 9 月30日現在の株主名簿に記載又は記録された株主又は質権者に対し、支払いを行います。



## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

## 独立監査人の四半期レビュー報告書

平成30年11月14日

日本空港ビルデング株式会社  
取締役会 御中

### EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 稲垣 正人 印

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 小野原 徳郎 印

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 佐藤 重義 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている日本空港ビルデング株式会社の平成30年4月1日から平成31年3月31日までの連結会計年度の第2四半期連結会計期間（平成30年7月1日から平成30年9月30日まで）及び第2四半期連結累計期間（平成30年4月1日から平成30年9月30日まで）に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書、四半期連結キャッシュ・フロー計算書及び注記について四半期レビューを行った。

#### 四半期連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

#### 監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した四半期レビューに基づいて、独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。

四半期レビューにおいては、主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対して実施される質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続が実施される。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。

当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

#### 監査人の結論

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、日本空港ビルデング株式会社及び連結子会社の平成30年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する第2四半期連結累計期間の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を適正に表示していないと信じさせる事項がすべての重要な点において認められなかった。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記は四半期レビュー報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（四半期報告書提出会社）が別途保管しております。

2. XBR Lデータは四半期レビューの対象には含まれていません。